



TITLE:

北米旅行記(7)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 北米旅行記(7). 天界 1934, 14(156): 233-237

ISSUE DATE:

1934-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165503>

RIGHT:

北 米 旅 行 記 (7)

山 本 一 清

(29)

前後二週間の東部旅行は誠にあわただしく、忙がしいものであつたが、しかし、極暑の候にも拘らず、幸ひに健康にめぐまれ、大體に於いて又、良い天候にも恵まれ、ボストンやセーレムから、ワシントン、ピッツバグ、シンシナチに至るまで、舊知新知の多くの都市を訪れ、會ひたい人々に會ふことが出来たのは、口筆に盡し難き満足であつた。もはや、之れで全アメリカを一巡し終つたやうな気がする。(未だ加州方面は、これからなので、こんなに感じるのは、チト早まり過ぎるのかも知れないが。)

シカゴの宿に歸り着いた七月12日の夜は、實に完全に熟睡した。翌十三日は10時頃に眼をさまし、ゆつくりと食事をつたが、はからずも、食堂やホールで、さきの東部旅行中にニウヨークで會つた二三の人々にまた會ひ、互ひに健康を祝し合つた。久しぶりに見る故國からの手紙や新聞、それから衣類等の整理等を半日がかりで終り、午後は米國郵船會社へ行つて、月末シヤトル發の船の約束などした。エヴンストンの北西大學天文臺から招待狀が來てゐるので、明日往訪すると定める。大博覽會は相變らず賑はつてゐるが、今日は自分の心を惹かない。Vancouverの學會で一所であつた東京帝大の坪井(誠)教授が會々當地に來てゐられて、今夕は共に島津岬氏から晚餐に招かれてゐるので、其の厚意を受け、夜おそくまで快談した。

(30)

七月14日、正午から島津氏にさそはれて博覽會場へ行き、電氣館や理學館其他の、前に見落した部分などを見た後、14時頃、日本館を訪れた。今日第一回の純日本式の御茶の儀式が新しい茶室で行はるといふので、其の席へも招かれ、ユツタリとして東洋氣分を味つてゐるうち、急に一天かき曇り、大雷風雨となつて了つた。こんな場合に、博覽會場へ入つてゐる世界各國の人

々の狼狽ぶりといふものがよくよく見學出來たのは面白かつた。16時頃、風雨が小止みになつたので、自分は島津氏と別れて、場外に飛び出し、ダウンタウンのループ線に乗つて、約束により、エヴァンストンへ行き、北西大學の教官集合所に待つてゐてくれた天文臺長リッ教授を訪ね、食事を饗せられ、十年來の積る話をした。リッ氏夫人は病氣入院中である由。食後、クラブ室で少時ビリヤードなどした後、21時頃から、天文臺へ連れて行かれ、臺内の諸設備や、研究ぶりなどを一通り見せられた。十年前、Fox 博士が此所の臺長であつた頃と比べて、様子がよほど變つてゐるのは、當然とは云へ、興味



大飛行艇隊を待つ群集（1）

深いことであつた。口径46糎(18吋)の大赤道儀だけは昔のまゝであるが、今は之れで太陽研究の代りに恒星スペクトル等の研究が行はれてゐる。

天文臺で、既に23時になつて了ひ、見送られて、高架鐵道により、

シカゴに歸り着いた時は翌15日の1時過ぎ、宿は表口が堅く閉ぢられてゐたので、一時如何しやうかと狼狽したが、幸ひ、未だ就眠してゐなかつた人の厚意で、室内に入ることが出來た。

（ 31 ）

七月15日！ この日はイタリヤから大西洋を越えて、はるばるやつて來る Balbo 將軍引率の大飛行艇隊が當地シカゴに到着する日なので、是非之れは見なければならぬと思ひ、朝10時頃に宿を出て、まづ市内の景況を見るためミシガン街の繁華なあたりを散歩した。果して、街路は同じ思ひで飛行隊の待つ人々が至る所に右往左往し、殊に電信會社の店先きは黒山を築いてゐる。此等の電信會社は、刻々、東部の各地から送られて來る電文を其のまゝ店頭に掲示するものだから、新聞ニウスよりも早く各地の狀が手に取るやう

にわかる。

飛行隊は今朝10時にカナダの Montreal 市外の着水場から出発し、大體は St. Laurence 河に沿ひ、Buffalo 市からは大湖上に出て、Cleveland や Toledo 市の上空を飛んで来る豫定であつた。ところが、Erie 湖の空に雷雨が猛烈を極めてゐることが氣象臺から知らされたので、急に針路を變更し、Toronto から Detroit の線をとることとなつたと、正午頃の電信には表はれた。それで、シカゴ到着も、始めは14時頃とか、15時頃とか、豫想されてゐたのが、だんだん延びてしまつた。自分は15時頃、(博覽會場には入らずに)、Field Museum の石段に腰を下してゐる群集の仲間に入り、人々の騒ぎを見つ、東の空を仰ぎ、又、自有のカメラで、群集の動きなどを撮影した。博覽會場内は今更云ふまでもない、場外も、Museum の前庭や、水族館の内外、其の屋上までも、幾萬といふ人がギッシリつまつてゐる。グランドパークも、大湖の水面も、皆、人々々である。天氣は上々である。皆、愚劣な騒ぎは、やらないが、しかし、一様に興奮してゐる！



16時、16時30分……

大飛行艇隊を待つ群集 (2)

……と、時刻は移るが飛行隊の姿は見えない！ 新聞ニウスは、しかし、「今 Lansing 市を通過した」、「Kalamazoo を越えた」と報じて来るので、とにかく、到着は間もあるまいと思つて、皆々東の空を見つめた。——時刻は愈々18時頃、水族館の石段あたりにゐる群衆が急に空を仰いて騒ぎ出した。何か見えて來たのかと思つて、様子が伺つてゐると、まもなくゴロゴロと爆音がして40機ばかりの飛行機隊が200米ばかりの上空を、南から現はれて來た。之れは、すぐ、米國陸軍の歡迎飛行隊だと知れたが、それから5分時とたいないうちに、いよいよ白銀の翼を夕陽に輝やかせつつ、南の方から、極めて低空

(ほど50米ぐらゐ)を、3機づつ一隊となつて、目的のイタリア飛行艇隊がやつて來た。幾十萬の群衆は、我れを忘れて歡呼する！誠に壯絶快絶な光景であつた。隊長 Ballo 將軍の乗つてゐる第一隊は豫定の着水場へ直ぐに着水したが、他の隊は、美しい姿勢を保ちつゝ、大シカゴ市の上空を幾度も旋回し、遂に18時半頃、漸く24艇全部が着水した。

着水後、96人の乗員は公私の群衆の歡迎裡に上陸し、行列や、いろいろの儀式を Soldiers Field で行ひ、それからホテルに落ちつく順序であつたが、自分は、晝間の、之れだけの盛儀を見ただけで満足し、宿に歸つた。

(32)

自分が米國東部の旅行中から、毎日の新聞を見て、是非おくれぬやうにシカゴへ歸らなければならないと、旅中、多少の犠牲を成て拂つたこともある理



大飛行艇隊を待つ群衆 (3)

由は、七月中旬、シカゴで、イタリアからの飛行艇隊の到着を見ることと、今一つ、Settle-Piccard 兩氏等のストラトスファイヤ上昇試験を見る目的であつたのである。イタリアの飛行艇隊の到着は、まづ、首尾よく觀察した。

Settle 氏等の上昇試験は、七月16日に決行せられるといふことが最近に知れ、自分は Lee 教授の斡旋で、Soldiers Field 内に着席する入場券までも與へられ、大に喜んでゐたのであるが、十五日の夜になつて、急に Settle 氏の上昇は無期延期されたといふことを Chicago Daily News 紙で知つて、落膽せざるを得なかつた。自分は月末にシャトルから乗船しなければならないし、尚ほ其れ以前にロリエルや、カリフォニヤの諸天文臺を一巡したい豫定である。それで、甚だ未練は残るけれど、無期延期された Settle 氏等の上昇を、いつまでも待つわけに行かない。近いうちに決行されないのならば、むしろ、斷念

して早くシカゴを去り、一日でもユツクリと加州方面で時を費したいと考えた。そこで、急に十五日の夜中に出発の旅装を整へ、翌十六日10時20分 La Salle 停車場發の Santa Fé 線で出立した。

（ 33 ）

Santa Fé 線は、十年前、即ち1923年の秋、ロスアンゲレスからシカゴに歸る時、乗つたことがある。こんどは、暑さの盛りの獨り旅なので、可なり苦んだ。只、この前、見なかつた窗外の景色、殊に大ミシシビ河の附近を、こんど見る事が出来たのは多少の満足であつたのと、例により、車内の乗合客が少くて、ノンキであつたことは氣休めであつたけれど、退屈には閉口した。それで、十六日22時頃、汽車が Kansas City に停車するや否や、堪らなく飛び出して、夜の市街を、いつまでも散歩したりした。

七月十七日も終日汽車は走りづめ。Texas や New Mexico あたりの廣漠たる野を行くのも、時候さへ良ければ、世間離れして、快いこともあるが、眞夏の此の汽車旅は、ホトホト飽きた。

（つづく）

た よ り

（口繪の寫眞に添えて）

前略 金星の試験御檢覽を賜はり度く御送り申し上げ候。何れも眼視に比し膨脹は難免且左端は内合前十日直射日光下にて撮影離角十六七度と存じ候。一昨年かの天界に獨逸にて内合前二日？に觀望せる記事あり、寫眞にて何の程度迄可能が存じ試み候。尙一兩日は可能かと存じ候ひしも、其の暇を不得候ひき。撮影は10センチ屈折接眼部に小カメラを裝し原板を更に引伸ばしたるものに候。尙續いて時々試撮の心組に候。敬具。

清 水 眞 一